

# 豊臣期大坂城下町の歴史的位置

## — 中近世移行期大坂研究の課題 —

仁 木 宏

### はじめに

天正十一年（一五八三）秋、大坂城の築城がはじまり、慶長二十年（元和元年、一六一五）五月、大坂夏の陣で大坂城が落城するまでの間、大坂城の城下に存在した都市を豊臣期大坂城下町とよぶ<sup>①</sup>。

この豊臣期大坂城下町については、多くの研究がさまざまな視角からなされている。しかし、そうした研究の流れを総合的に整理した論致はいまだない<sup>②</sup>。もとより筆者とて、豊臣期大坂城下町については本格的な研究をおこなっておらず、十分な研究史整理の準備もない。しかし、大坂城下町に先行する大坂（石山）本願寺・寺内町については論及したことがあり、また豊臣政権期の京都をあつかったり、中世から近世への移行期の都市史について理論的な整理を試みた経験もある<sup>③</sup>。そこで本稿では、きわめて雑駁ではあるが、豊臣期大坂城下町研究の多様な可能性を示し、同城下町の歴史的な位置を明らかにするための方法を提起したい。

豊臣期大坂城下町は前期・後期の二段階にわけてその発展が説明さ

れている。前期には、大坂本願寺・寺内町の遺構も利用して本丸と二の丸が造営され、また「八丁目」（現・上本町四丁目付近）から四天王寺にむかつて平野町が形成された。大川（淀川）の対岸、天満地区には一時、本願寺寺内町も占地した。慶長三年春以降の後期には、二の丸の西側・南側に三の丸が造営されて大名屋敷が建ちならぶとともに、東横堀の西側に船場地区が開発された。なお、以下の説明では便宜上、三の丸内部を三つに分ち、南東部を玉造地区、南西部を法円坂地区、西部を大手前地区とよぶ。この用語は、三の丸築造以前の豊臣前期にも用いる。また大手前地区・法円坂地区の西側、東横堀までの間を内町とよぶことにする。

ところで、これまでの豊臣期大坂城下町研究の方法にはどのような限界があっただろうか。一つには、都市構造をめぐって、大坂城下町独自の研究は発達したものの、他の城下町や他種の都市との比較研究がほとんどなされていないことがあげられる<sup>④</sup>。同じ豊臣（羽柴）秀吉がきずいた聚楽第（京都）や伏見との比較、また「天下人」の城下町の流れでいえば安土・江戸との関係、さらには秀吉の一族が城主であった大和郡山・近江八幡・丹波亀山等への影響などについてである。

同時代の他の都市、たとえば堺や摂津・尼崎・兵庫、旧城下町であった摂津・池田・伊丹、寺内町から在郷町に転じた河内・和泉の町々など、大阪平野に点在する諸都市との関係や農村とのかかわりなど、摂河泉の地域社会の中で、豊臣期大坂城下町がどのような位置を占めたのかについての論及もあまりない。

第二の問題点は、総合的・学際的な研究が進んでいるとは必ずしもいいがたいことである。近年、豊臣期大坂城下町に関する考古学的な研究は飛躍的な進歩を遂げた。その一方で、かつて城下町研究をリードしていた文献史研究は停滞気味である。また歴史地理学、建築史学<sup>(6)</sup>などの連携も、他の先進的な都市とくらべて十分になされていない<sup>(7)</sup>。

こうした限界、問題点を克服し、豊臣期大坂城下町を日本の都市史全体の流れの中にどのように位置づければよいのか。以下、テーマごとに章を分かつて論じてゆきたい。

## 第一章 中世末期の地理的環境

大坂城が位置する上町台地先端部とその周辺の自然地形については、これまで、古代難波宮やその付属施設の立地をめぐる注目されてきたが、中世・近世の都市大坂を考える際にも重要な要素となる。

先史時代以来、上町台地の西側には台地と平行して難波砂堆とよばれる巨大な砂堆が形成されていた。そうした砂堆の一番東、上町台地

との間には大きなラグーン（潟湖）があったが、その場所はその東横堀と一致する。中世初頭以降、当該地域の中心的な港湾として史料にあらわれる渡辺津の場所については諸説あるが、近年、松尾信裕は、渡辺津をこのラグーンを中心とする地域に比定している。発掘成果によれば、いまだ明確な遺構は確認されていないものの、中世初期にさかのぼる遺物が多く発見されることから、現在の東横堀川両岸が都市的な集住空間と認められるという<sup>(8)</sup>。

大川をはさんで対岸に位置するのが、天満神社とその門前町である。大澤研一は、近世の天神橋筋が天神社の西側をほぼ直線に北上し、北摂方面につづくことに注目し、この道を中世以来の主要道と認定している<sup>(9)</sup>。さらに、最近の発掘調査によって、大川北岸の天神橋筋の西側にあたる場所（北区菅原町）で、十二〜十四世紀の多数の建物跡が発見されている<sup>(10)</sup>。

上町台地上を南下したところに位置する四天王寺の門前も、中世においてはかなりの都市的な発展を上げていた。十六世紀前半には、摂津欠郡守護代が天王寺城を築いて本拠の一つとしていたらしく、当該地域の政治的な中心地としての機能を果たしていた<sup>(11)</sup>。

これら複数の都市的な場相互を結び、さらに遠隔地にいたる交通路も中世後期段階には想定される。水上交通のうち、最も重要な瀬戸内ー京都ルートについては、神崎川を経由するのが一般的であったとされるが、大坂寺内町で川船に乗り換えた旅行者の記録もあり、堺の繁栄を考えれば、淀川（大川）の交通量も決して無視できない。また旧

大和川を使った水運は河内の村々を結んでいた。

陸路では、上町台地の西寄りを南北に縦断する熊野街道（松屋町筋ないし谷町筋）が四天王寺から住吉、堺方面へつながる。この街道を北にのびし、大川を渡った対岸を北上する天神橋筋、淀川左岸を山城八幡・淀方面へつながる京街道、河内平野を横断して大和を結ぶ奈良街道<sup>(12)</sup>などがある。また北西方向の尼崎・西宮方面への道も、近世ほど明確ではないにしても存在しただろう<sup>(13)</sup>。

このように、上町台地先端部周辺は、中世においては複数の都市的な場が広く展開し、水上・陸上交通路が四達する要地だったのである。こうした地理的環境を前提として大坂寺内町・城下町が形成される。

## 第二章 大坂（石山）本願寺・寺内町 ―継承と克服―

近世都市の成立過程を説明するためには、城下町的发展段階を追うだけでは十分ではなく、中世の多様な都市のあり方を前提とすべきこと<sup>(14)</sup>というまでもない。大坂についても、近世城下町の出発点である豊臣期大坂城下町を説明するためには、その前身である大坂（石山）寺内町の何が継承され、何が克服されたかに注目する視点が重要である。大坂寺内町の空間構造は一見、近世城下町のそれと類似している。しかし、その基礎にある社会構造のあり方を注意深くながめれば、両者の相違点もきわだつてくる。

寺内町の中心核である本願寺（御坊）は、「開かれた核」である点

に特徴がある。そこには不特定多数の諸国の門徒が毎日、参詣のために入内したし、法主と大坂町民は狭義の支配者―被支配者としてだけ対面したのではなく、綱引きや演能などの場面で直接交流をもった。

大坂寺内町はこの御坊を中心とするゆるやかな同心円構造をとっていた。すなわち、御坊の周囲には、「宿所」とよばれる、法主一族や有力坊主の屋敷が集中する地区が位置し、さらにその外側に町屋地区が広がった。しかし、宿所の集中性はかならずしも高くなく、有力坊主でも町屋地区の中に宿所を構える者がいたし、逆に宿所地区内にも町屋が少なくなかったと推定される<sup>(15)</sup>。

寺内町を囲繞する都市城壁である惣構は、本願寺・法主と町民の「共同経営」の様相を呈していた。惣構の修築には、本願寺によって動員された河内門徒とともに寺内町民も従事し、その修築工事を法主が巡察している。惣構の門の開閉権は究極的には本願寺がにぎっていたが、門の鍵の管理は町へ移管された。惣構の拡張は都市（寺内町）域の拡大を意味したが、その拡張は町共同体（新屋敷）によって主導的に進められ、本願寺はその地を買得することで後追的に保障していったのである<sup>(16)</sup>。

摂河泉地域の中心地としての大坂の地位を一定程度、確立したのも寺内町であった。

大坂寺内町の六町はそれぞれ町外の交通路と密接に関係しながら発展していった。北町・北町屋は「寺内之浦」とよばれる港津をとまなび、また渡辺津に隣接することから、瀬戸内・南海水運や、天満天神

社門前から天神橋筋につながっていた。同様に、清水町は四天王寺門前から熊野街道を堺・和泉方面へ、新屋敷（北部）は京街道や旧大和

川水運に、南町・新屋敷（南部）は奈良街道にそれぞれアクセスしていたのである。<sup>(17)</sup>

権門としての本願寺のもつ法的な保障力も大坂寺内町の中心性を高める効果を発揮した。本願寺は、寺内町民が周辺農地に対してもつ権利を保護した。著名な「大坂並」体制によって摂河泉の「衛星寺内町」に都市特権を波及させ、淀川や京街道（河内路）の交通を確保した。こうした効果によって、周辺農村などから大坂へ人口が流入し、また真宗の「首都」として全国から門徒が大坂へ参集したのである。<sup>(18)</sup>

このように中世都市として高い発展性を有した大坂寺内町であったが、戦国時代固有の限界性からのがれられたわけではなかった。渡辺津や四天王寺門前は、本願寺・寺内町がいくらか影響力を強めてもその主権のおよばない別個の都市であった。当時の大阪平野最大の都市である堺には、経済的に従属していたとの理解もある。<sup>(19)</sup> また、寺内町がどれほどの特権を獲得したとしても徳政や所質が横行する社会が変化するわけではなく、そこに「大坂並」体制の限界を感じ取った寺内町民は、統一政権への「期待」を示す志向を有したと筆者は考えた。<sup>(20)</sup>

以上にみてきたように、空間構造や社会構造において一定の達成をとげた大坂寺内町を前提としたため、豊臣期大坂城下町は、その発展的継承と限界の克服を当初より目標とせざるをえなかった。

### 第三章 城下町の空間構造

現在、豊臣期大坂城下町の空間構造を説明する理論としては内田九州男説が通説の地位を占めている。

内田は、豊臣前期と後期の間に、城下町の都市構造の大きな転換を認めている。豊臣前期は、天満（当初、朝廷・五山寺院などを移転させてくることを企図。のち天満寺内町が立地）―内町・大手前地区・法円坂地区―平野町―四天王寺とつづく、南北軸中心の町並みであった。とりわけ、上町台地上に新たに建設された平野町が目ざされ、大坂から堺にまでいたる都市構想の存在を示す。ところが後期になると、新たに三の丸を築造したことともない、前期に大手前地区・法円坂地区などに居住していた町民を船場に移転させた。そして新開発の船場に設定された東西方向の街路が東横堀を越えて内町の町並みの方向性をも規制する。こうして城下町全体が東西軸中心の町並みに変化したというのである。前期においては堺の港湾機能の取り込みをはかっていたのが、後期になると船場に大坂独自の港津の建設をはじめたという。<sup>(21)</sup>

城下町の構造をマクロな視角からとらえ、そのドラスティックな変容を描いたすぐれた分析である。ただ、一つ疑問点をあげれば、城下町全体の空間構造を規定する存在として取り上げられているのが、前期においては平野町、後期においては船場という新開発地域、つまり

都市全体から見れば周縁の地域であることである。すなわち、城郭に隣接する大手前地区・法円坂地区や内町の具体的な内部構造についてはほとんどふれられていない。

これは、平野町や船場の町並みの骨格が近世城下町にも継承され、近世中期以降、近代にいたるまで基本的な改変をうけなかったため、その空間構造を容易に検証できるのに対し、豊臣期大坂城下町の三の丸は十七世紀以降の地割の変容がはげしく、近世中期以降の地図類ではその実態が解明できないことによるのだろう。しかしいうまでもなく、城下町の中で最も重要なのは城郭に近接した部分であり、城下町の構造を分析するためにも、そうした地域の実態の解明は必需である。もちろん、これまでそうした地域の分析が等閑にされてきたわけではない。ここでは、はじめに、そうした研究のいくつかを参考にしながら、とりわけ豊臣前期における論点を整理することからはじめたい。

### 1 豊臣前期の都市構造

豊臣前期の大坂城下町内を貫通する主要な道路としては、上町台地西端を南北に縦断する熊野街道がまずあげられる。しかし、城下町東部から河内・大和方面へつづく奈良街道の存在を前提とすれば、大坂城二の丸の南側を東西に貫通する道路も当然、存在したはずである。鋤柄俊夫は、この南北路と東西路が二の丸を囲む、し字型の町並みが基準であったと推定している。<sup>(22)</sup>だとすれば、少なくとも、のちに三の丸となる地域においては、内田説のように、豊臣前期、南北軸のみを

規定的と考えることはできないのである。

では、大坂城の西側、城下町の中心部にあたる大手町地区・法円坂地区にはどのような施設があったのだろうか。秀吉に代わって関白となり、聚楽第を譲られる豊臣秀次の大坂屋敷が、大手土橋を出てすぐの南側一帯に立地したことが推測されている。<sup>(23)</sup>また、地域の氏神で、豊臣後期には四天王寺近傍に移転する生玉社（生国魂神社）も、この頃には法円坂にあったという。

大手町地区の西側、上町台地の西斜面には、豊臣前期までは開析谷地形が残っていたと鋤柄俊夫はいう。<sup>(24)</sup>鋤柄によれば、谷に面した台地上には大名屋敷が立地し、谷底の低地部分には地形に応じて東西道がひかれ、その両側に町屋が建ちならんでいた。町屋は、当初、職人の作業場であったのが、城下町の発展にともない商人の住宅に変化してゆくとしている。高度差こそあれ、大名屋敷と町屋が近接して存在することから、鋤柄は、当地では、いまだ身分別の居住地区分が完成していないと結論づけた。

大坂城の南側については、奈良街道へつづく東西路があったはずだが、当該期の発掘成果が少なく、詳細は不明である。玉造地区にも自然の谷地形が残っており、小出吉政のものと思われる屋敷が立地していたという。<sup>(25)</sup>また発掘調査の成果によれば、前期の内町地域では、南北軸にあわない道・建物遺構が発見されており、その町割りとは単純な碁盤目状ではなかったという。

内町の北部、大川端に面した部分には「大坂浜」とよばれる港津が

あつた。<sup>(26)</sup>天神橋南詰にあたり、船着場の他にイエズス会の教会や加藤清正屋敷などがあつたこともわかっている。矢内昭は、この地区に、熊野街道に並行するいく筋かの南北道（近世の東馬屋町・西馬屋町・石屋町などにあたる）がすでに存在したことを想定している。<sup>(27)</sup>

この「大坂浜」の西側にある東横堀の湾入部（ラグーンの名残）を越えたさらに西側の船場は、難波砂堆の一部で、豊臣後期に本格的に開発される。しかし、この地域は、前期から一定の都市的様相を示しており、朝鮮貿易に従事する商人が居住していたことが確認される。<sup>(28)</sup>発掘調査によれば、道修町・平野町一帯には铸造遺構・遺物が見つかつており、鉄铸件・鍛冶の作業場兼住宅があつたと考えられている。<sup>(29)</sup>早くも天正年間には「道修町に火事これ有り、家廿計り焼失」という記事が見え、また浄土真宗の渡辺御坊も道修町にあつたという。但し、「道修谷」という地名からもうかがえるように、発掘調査によると、豊臣前期段階の船場は起伏ある地形が特徴的で、後期のような統一的な敷地整備はなされていなかった。<sup>(31)</sup>唯一、内町・大手町地区方面を直線で結ぶ高麗橋通りを中心とした地域のみ一定度ととのつた町並みが整備されていたらしい。<sup>(32)</sup>

慶長の大地震（文禄四年、一五九五年）では、これら大川端の地域で最も被害が甚大であつたらしい。

大坂の市中では屋根瓦でおおわれた家々やそのほかの諸建築物の大部分が、とりわけ川沿いで倒壊し、噂によると六百人以上が倒壊によって押しつぶされたということである。<sup>(33)</sup>

おそらく東横堀をはさんだ内町側と高麗橋通り・道修町側が一体として発展していたのであり、中世の渡辺津を継承した、繁華で雑然とした川港が形成されていたのであろう。

以上、豊臣前期大坂城下町の空間構造の特徴と考えられる点を抽出してきた。大坂城を中心に、大手町地区・法円坂地区、玉造地区、内町、「大坂浜」、高麗橋通り・道修町という形で、同心円的に広がる空間構造がみてとれる。しかし、玉造や道修町付近にも有力大名の屋敷地が想定され、また大手前地区の台地西斜面では大名屋敷と町屋が隣接するなど、身分別居住の確立、空間構造の求心性はいまだ不十分であつた。

東横堀をはさむ「大坂浜」から高麗橋通り・道修町あたりには、中世渡辺津の景観を色濃く残す港津が発達しつつあつたとみられる。この付近は都市の周縁にあたり、町割も不統一であつたことから、いまだ権力の統制が貫徹しないような空間が広がっていたと推定できよう。

## 2 豊臣期城下町の歴史的的位置

従来、織豊系城下町の発展段階論としては小島道裕の説が著名である。小島は、清須、岐阜、安土、近江八幡などをとりあげ、戦国期城下町から織豊系城下町への発展を都市構造の一元化、求心性の強化などから鮮やかに描き出した。<sup>(34)</sup>

この小島説にも問題点は多いが、ここでは本稿の視角から次の一点

を指摘しておきたい。小島の対象が、織田信長段階の安土までは「天下人」の城下町であったのが、秀吉以降は、近江八幡、伊勢松ヶ島など、地域支配の拠点城下町に変化してしまったことである。すなわち、小島の議論の中には、大坂、聚楽第、伏見や、徳川家康の江戸などは組み込まれていないのである。これは、豊臣時代以降においては、小島の発展段階論に適合的な城下町がそうした中小規模の城下町だけに限定されることによるのだろう。しかし、「天下人」の「首都」を論理にふくみこまない城下町の発展段階論は、やはり不十分といわざるをえない。大坂や江戸を的確に位置づけた織豊系城下町論の構築が求められているといえよう。<sup>(36)</sup>

小島の研究をうけて、考古学的な研究成果も加味し、独自の織豊系城下町発展段階論を提起したのが前川要である。前川は豊臣期大坂城下町を編年の第二段階（a）期に位置づけている。この時期は、一族・上級家臣が惣構内に集住して中下級家臣と隔離され、城下町の中で長方形街区の広範な広がりが確認される段階であるという。<sup>(37)</sup> 前川のこの段階規定は、大坂の場合、豊臣前期にあてはまるものもあれば、豊臣後期を待たないと適合しない面もある。前期の場合、たとえば、秀吉が最も主導的に町づくりをすすめた平野町は、前川のいう典型的な長方形街区であるといえよう。しかし、城下町中心部の大手町地区や内町、また中世渡辺津の空間構造を残す「大坂浜」などについてはこうした段階設定は必ずしもあたらない。<sup>(38)</sup>

同様に、豊臣前期城下町を内田九州男のように、後期と対比する意

味で南北軸に一元的に規定された都市構造ということではできないであろう。むしろ、より多様な要素をふくみこみ、多元的な都市構造を残す、と規定した方がよいのではなからうか。

豊臣期大坂城下町を評価する際、中世的到達点を認識し、有効に利用し、より有機的にネットワークさせる町づくりをおこなったことに注目する伊藤毅の視角は、筆者と共通している。すなわち、第二章でみたような大坂寺内町の構造と、豊臣期大坂城下町の空間構造の間に類似点、継承した部分が大変多いのである。たとえば、一定の同心円的構造をとりながらも、身分別居住が貫徹しておらず、求心性に欠ける点などである。大坂寺内町が志向していた、周辺都市への影響力の行使は、大坂城下町の時代になって、四天王寺門前への平野町の延伸、渡辺津の包摂、天満天神社門前の城下町化などによってはたされた。戦国時代の寺内町ではできなかった、都市構造の拡大、一元化を統一政権である豊臣権力が実現していったのである。

豊臣前期の大坂城下町の特徴がこのように大坂寺内町との類似性、継承性に求められるとすれば、後期の城下町はこれとは段階を画す発展段階にあったというべきだろう。

玉井哲雄によれば、豊臣後期大坂城下町ではじめて同心円的都市形態が実現したとされる。すなわち、本丸・二の丸・三の丸を中心に、その外側の町屋を囲む惣構ができ、さらにその外側に船場・天満の町が位置づけられている。これによって、戦国期城下町とは異なる、求心的な近世城下町がはじめて建設されたという。これは単に、大坂城

下町や都市大坂の歴史において画期的であっただけでなく、全国的な城下町の発展段階の中で最重要の画期であると考えている。また玉井は、鋤柄が注目した内町西側の開析谷の地形改変に注目し、大量の人員を短期間に投入し、地形から改造するような大工事を都市に施すようになった点にも、近世城下町の特徴を発見した。<sup>(40)</sup>

さらに玉井は、豊臣前期に開発された平野町の六〇間×四〇間の長方形街区と、豊臣後期の内町の六〇間×三〇間、ないし六〇間×二〇間の街区を対比的に取り上げ、都市の基礎的構造のちがいを強調する。但し、玉井によれば、前者は京都、後者には寺内町の町割との関係が認められ、豊臣権力がどのような町割を導入するか、試行錯誤した過程を示すものであるという。すなわち、豊臣権力が大坂城下町で形成した町割・屋敷割は、中世の京都や寺内町などで都市住民が自立的に作り上げてきた方策を採用入れたものだったというのである。<sup>(41)</sup>

最後に、大坂城下町の惣構を論じること、城下町の都市構造を解く、新しい方法が得られる可能性があることにふれておきたい。

豊臣期大坂城下町の惣構は従来、文禄三年（一五九四）にはじめて築かれたと考えられてきた。その範囲は、北は淀川、東は猫間川、西は東横堀川であるが、これらはいずれも自然地形に大きく依存している。これに対して城下町の南側は上町台地の丘つづきであるため、惣構構築のためにはとりわけ大規模な土木工事が必要であった。近年、積山洋によって、その南辺の惣構（「空堀」）の正確な位置が解明されている。<sup>(42)</sup>

たしかに冬の陣の時の惣構の範囲は如上の通りであろうが、この時の惣構はいつまでさかのぼるのか。文禄三年以降、変化がないのかどうか、確かなことはわかっていない。そもそも、本当に文禄三年前、大坂城下町は惣構をもたなかったのであろうか。

筆者は、都市の周囲を圍繞する惣構は、畿内の自治都市に最初に発達し、戦国時代末期には畿内の城下町に展開し、それが豊臣系城下町に採用されることで全国展開すると考えている。都市の惣構は都市住民の生命・財産を保護するためのものであり、これを誰が構築・管理するかはその都市の公権のありようをも示唆する。<sup>(43)</sup>

そうした視点からみたと、文禄三年に惣構（「空堀」）が構築された際、それまで都市開発の先端になっていた平野町がなぜ、惣構の外側に「排斥」されてしまったのか。豊臣後期においては、惣構内部の大半が大名屋敷街であるのに対し、船場・天満などの新開地がいずれも惣構外なのは何故か、などの点が問題となろう。さらに、天満寺内町については明確に、秀吉が本願寺に惣構を造らせなかったことが知られている。<sup>(44)</sup>

大坂冬の陣にあたって、はたして大坂町人は大坂城に籠城したのであろうか。

### 3 摂河泉の中の大坂

摂河泉という地域の中での大坂の位置を検証することも必要である。



たとえば、豊臣期の摂河泉には、大坂以外に、摂津兵庫・尼崎・茨木・高槻、和泉岸和田などに城があり、それぞれ城下町を形成していた。また城が築かれなかった河内国などでは、秀吉の直臣団が大坂城に出仕するための在坂賄料として、それぞれ小さな知行高の地を与えられていた。当該地に広く展開する蔵入地の問題もふくめ、大坂城・城下町の歴史的位置を考察する必要があるだろう。

また堺・平野などのいわゆる「自治都市」や、在郷町に変化してゆく寺内町との関係についても分析する必要がある。富田林寺内町については脇田修がさまざまな角度から検討を加えている。<sup>45</sup>近年の大澤研一の研究によれば、秀吉は、寺内町を町場として認識し、そこに蓄積された経済機能・経済力を掌握・吸収しようとしていたという。<sup>46</sup>

本願寺・寺内町が「大坂並」体制によって実現した、大坂の中心地機能と比較して、豊臣期大坂城下町と寺内町や他種の都市との関係がどのように評価できるのか、分析を深める必要があるだろう。

#### 第四章 豊臣期「三都」論

従来、ともすれば、豊臣政権の「首都」は大坂でありつづけると無前提に考えられてきた。これは、秀吉が信長横死後、最初に本格的な城郭を築き、また最大の城下町を造営したのが大坂であったこと。秀吉が死去し、のちに秀頼が徳川家康に攻められて没したのが大坂であったことなどが原因であろう。

しかし横田冬彦は独自の「武家国家の首都」論を展開し、大坂、京都（聚楽第）、伏見相互の性格、役割分担について、以下のような興味深い分析をしている。

天正十一年（一五八三）、秀吉が天皇や五山寺院を大坂へ移転させようとした時、大坂は武家集団を中心に、朝廷・公家、寺家権門を統合するとともに、京都・大坂・堺の経済機能をも統合する、名実ともに「首都」たることを目指していた。ところがこの計画が失敗すると、天正十四年には京都に聚楽第の造営を始め、翌十五年、秀吉は正妻・母親と共に大坂からこの聚楽第に移徙した。その際、秀吉は、一族や諸国の大名が本人だけでなく、妻子も在京することを強制したため、それぞれの領国ではなく、京都が大名にとつての本拠地となったのである。こうして京都が全大名の「公儀」の所在地となり、事実上、「首都」となったのに対し、大坂は一部の西国大名などの屋敷が存在するにすぎなくなった。

ところが、伏見の「隠居所」に移った秀吉と、秀吉の跡を襲って聚楽第に住し、関白となった秀次との関係が悪化すると、文禄二年（一五九三）、有力大名たちは主たる屋敷を伏見に移した。文禄三年正月には、秀吉が全国の名を動員し、伏見に「惣構堀」以下を造営したため、「首都」京都の二重化がおこり、結果として、豊臣期「三都」時代を迎えることとなった。

文禄四年七月、秀次が失脚すると聚楽第は破却され、諸大名の屋敷は伏見に統合された。ところが翌五年（慶長元年、一五九六年）閏七

月、慶長大地震でそれまで指月にあつた伏見城が大きな被害を受けると、秀吉は新たに木幡山に城郭を築き直した。しかし、慶長三年になると、大坂城三の丸を拡張し、諸大名屋敷と妻子を伏見から大坂に全面移住させ、伏見城を徳川家康に与えたのである。ここに、ようやく大坂が「武家の首都」として確立するのである。<sup>(47)</sup>

このようにみてくれば、政治的な意味に限定しても、豊臣期を通じて大坂が永続的に首都であつたわけではないことがわかる。まして朝廷や寺家権門など権威・宗教の問題、経済などのさまざまな側面において、大坂が首都であると単純に指定することは困難であり、大坂、京都（聚楽第）、伏見の「三都」の相互関係の中で論じる必要があるのである。<sup>(48)</sup>

城下町の空間構造についてもより精細に「三都」の比較をおこなうべきであろう。たとえば城下町の町屋地区のメインストリートは、京都では聚楽第と内裏を結ぶ上・下の長者町通、伏見ではこれも平行する京町通・両替町通である。大坂でも、谷町筋と上本町筋の間に位置する、本平野町筋・塩屋町筋をはさんで新開発の平野町がつくられた。内町では、南北道として熊野街道一本しかこれまで注目されていないが、大澤研一は松屋町筋と谷町筋が平行してのびる状況を想定している。<sup>(49)</sup> 豊臣政権期においても多くの都市が一本街村状の町並みを基本とするの<sup>(50)</sup>に<sup>(51)</sup>対し、こうした平行する二本の大路を通すことで、前川がいうように、長方形街区と短冊型地割からなる特徴的な町並みをつくり、城下町の「格」を示す意味合いがあつたのかもしれない。

惣構のあり方についても比較検討する意義がある。京都では天正十九年（一五九一）に「御土居」が築造された。これに対して文禄三年（一五九四）、伏見城の三の丸石垣・惣構堀築造工事と大坂城の惣構工事が同時におこなわれている。こうした先後関係や、惣構が囲う範囲、惣構の外に「排斥」されたものが何か、など、論点は多岐にわたる。城郭と大名屋敷の配置の検討も権力構造と城下町の性格を理解する上で重要である。伏見城（木幡山）では、本丸・二の丸を取り囲むように、内郭に石田三成ら五奉行の屋敷が展開している。<sup>(52)</sup> 聚楽第についても周辺の武家屋敷の復元図が提示されており、大坂についても考古学的な成果から一定の推定がなされている。<sup>(54)</sup>

以上のように、豊臣期の「三都」を時代を追って比較検討することで、豊臣政権の権力構造、大名支配の進展、都市支配の変遷など、多様な側面が明らかになるものと期待される。

#### おわりに

豊臣期大坂城下町の研究は現在、新しい段階をむかえているといえよう。すなわち、中近世移行期の全国的な都市の潮流の中で、豊臣期大坂城下町の都市構造がどのような歴史的位置にあるかを説明することが期待されているのである。

戦国期城下町から織豊系城下町への流れ、とりわけ安土・大坂・江戸という「天下人」の城下町の展開、あるいは秀吉の「三都」のあり

方をまず分析する必要がある。それだけでなく、京都・堺や寺内町などの都市構造との比較検討もおこなわなければならない。ここでの都市構造とは空間構造と、それを規定する社会構造の両方である。

その際、文献史、考古学だけでなく、歴史地理学、建築史学などの成果を積極的かつ有機的に活用し、真の意味で学際的研究を追究することが求められていることはいまでもない。

本稿での指摘の多くはまだまだ思いつきの域を出ないが、本稿が新しい豊臣期大坂城下町研究の出発点の一つになれば幸いである。

#### 注

- (1) これと区別するため、徳川時代の城下町を「近世城下町」と表記する。
- (2) 大坂城の研究史については、最近、内田九州男がまとめている（内田「大阪城研究のあゆみ」、渡辺武館長退職記念論集刊行会編『大坂城と城下町』、思文閣出版、二〇〇〇年）。また近世都市大坂の研究史は、八木滋「近世大坂研究の現状と課題」（塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』、山川出版社、二〇〇一年）参照。
- (3) 拙著「空間・公・共同体」（青木書店、一九九七年）。最近の論稿としては、拙稿「惣構論序説」（『豊臣秀吉と京都』、文理閣、二〇〇一年刊行予定）など。
- (4) 好著、佐久間貴士編『よみがえる中世2・本願寺から天下へ大坂』（平凡社、一九八九年）も、如上のような限界をはらんでいる点にかなりはなれない。

(5) 中部よし子「豊臣氏時代の城下町大坂」（岡本良一編『大坂城の諸研究』、名著出版、一九八二年）などがあつた。

(6) 伊藤毅「近世大坂成立史論」（生活史研究所、一九八七年）など。

(7) 近世大坂をあつかった総合的研究としては、最近、塚田・吉田編『近世大坂の都市空間と社会構造』（前掲注（2））が上梓された。

(8) 松尾「船場地域における大坂城下町下層の遺跡」（『大阪市文化財協会研究紀要』二、一九九九年）

(9) 大澤「歴史環境から見た中世大坂」（『近世大坂研究会報告』、二〇〇〇年二月三日）。

(10) 佐藤隆「天神橋遺跡の調査成果」（『一六二七会報告』、二〇〇〇年二月一日）。

(11) 伊藤毅著書前掲注（6）、石田晴男「両山中氏と甲賀『郡中惣』（『史学雑誌』九五―九、一九八六年）。

(12) 近世の奈良街道と同じルートか、近世に俊徳道とよばれる街道が主要であつたかは不明。

(13) 藤田実「寺内町大坂（石山）とその地理的環境」（『大坂城と城下町』、前掲注（2））図7「戦国期の大坂平野」参照。同図は、多少疑問点もあるが、中世末期における当該地域の交通路を復元した興味深い成果である。但し、筆者（仁木）の寺内町研究に対する藤田の批判については的外れであり、別の機会に反論を予定している。

(14) 拙稿前掲注（3）参照。

(15) 拙稿「寺内町における寺院と都市民」（『講座蓮如』三、平凡社、一九

九七年。

- (16) 拙稿「大坂石山寺内町の空間構造」(上横手雅敏監修『古代・中世の政治と文化』、思文閣出版、一九九四年)。

- (17) 拙稿前掲注(15)。

- (18) 拙著前掲注(3)。

- (19) 原田正記「寺内町と堺の關係について」(『日本史論集』二、一九八三年)。

- (20) 拙著前掲注(3)。

- (21) 内田九州男「豊臣秀吉の大坂建設」(『本願寺から天下へ大坂』、前掲注(4))。

- (22) 鋤柄俊夫「大坂城下町に見る都市の中心と周縁」(『中世都市研究』一、新人物往来社、一九九四年)。

- (23) 特別展「城下町大坂」図録(一九九三年、大阪城天守閣)。

- (24) 鋤柄論文前掲注(17)。

- (25) 黒田慶一「鉄砲荷札木簡と玉造の大名屋敷」(『大阪の歴史』四八、一九九六年)。

- (26) 豊臣後期には東横堀川に架かる「浜の橋」(今橋)が確認されるが、これは「大坂浜」にちなむものと推測されている。

- (27) 矢内昭「城下町と周辺の開発」(『新修大阪市史』三、一九八九年)。

- (28) 『言経卿記』文禄三年三月二十九日条。

- (29) 森毅「都市の中の職人・商人」(『本願寺から天下へ大坂』、前掲注(4))。同「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」(『ヒ

ストリア』一三九、一九九三年)。

- (30) 『天正毛利記』。

- (31) この点、伊藤毅著書前掲注(6)の想定には誤りがある。

- (32) 森毅・豆谷浩之「考古学から見た船場の成立と展開」(『大坂城と城下町』、前掲注(2))、宮本雅明「都市社会の基盤・城下町」(『京・大坂の景観演出』(高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』、東京大学出版会、一九九三年))。

- (33) 『イエズス会日本年報』一五九六年度年報補遺。

- (34) 小島「戦国期城下町の構造」(『日本史研究』二五七、一九八四年)、同「織豊期の都市法と都市遺構」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八、一九八五年)。

- (35) 拙著前掲注(3)参照。

- (36) 千田嘉博「織豊系城郭の形成」(東京大学出版会、一九九九年)は、江戸まで視野に入れた分析をおこなっている。

- (37) 前川「『都市考古学』の研究」(柏書房、一九九九年)。

- (38) 権力の意志がストレートに表現される、都市開発の最先端部分のみに注目しては、都市の全体構造や発展段階を見誤る可能性があるといえよう。

- (39) 伊藤著書前掲注(6)。

- (40) 玉井「近世都市空間の特質」(吉田伸之編『日本の近世』九、中央公論社、一九九二年)、同「都市の計画と建設」(岩波講座『日本通史』一一、岩波書店、一九九三年)、同「町割・屋敷割・町屋」(『年報都

市史研究』二、山川出版社、一九九四年。

(41) 玉井論文前掲注(40)。

(42) 積山「豊臣氏大坂城惣構南面堀の復原」(『大坂城と城下町』、前掲注(2))。

(43) 拙稿前掲注(3)。

(44) 『フロイス日本史』一(中央公論社、一九七七年)。

(45) 脇田「日本近世都市史の研究」(東京大学出版会、一九九四年)。脇田は豊臣期の資料を、戦国期の寺内町を説明する根拠として利用することが多いが、富田林の性格は豊臣期になって大きく変わっている可能性があり、注意を要する。

(46) 大澤「中近世移行期における在地寺内町の動向」(地方史研究協議会編『巨大都市大阪と摂河泉』、雄山閣出版、二〇〇〇年)。

(47) 横田「近世社会の成立と京都」(『日本史研究』四〇四、一九九六年)。

(48) 最近の成果として、中村博司「秀吉の大坂城拡張工事について」(『大坂城と城下町』、前掲注(2))がある。

(49) 大澤報告前掲注(9)。

(50) 千田著書前掲注(36)。福島克彦「戦国織豊期摂津富田集落と『寺内』」(『寺内町研究』五、二〇〇〇年)。

(51) 前川著書前掲注(37)。

(52) 山田邦和「伏見城とその城下町」(『豊臣秀吉と京都』、前掲注(3))。

(53) 足利健亮「中近世都市の歴史地理」(地人書房、一九八四年)。

(54) 『城下町大坂』(前掲注(23))。

〔付記〕

本稿は、大阪市立大学日本史学会第三回大会報告(二〇〇〇年五月十三日)をもとに、大坂城研究会での報告(二〇〇一年二月十六日)の内容も加味してまとめたものである。両会の場で御助言いただいた皆さまに感謝の意を表したい。